

おめえはおらでおらは
おめえ

とととととととうしば

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

孫悟空は気がつくくと、別人になり過去に戻っていた。

自分をこえることを目標とし、トレーニングを続ける。

目次

第1話 『元主人公 マト』	1
第2話 『打ち上げ直前』	5
第3話 『点火』	11
第4話 『開花』	17
第5話 『予兆?』	26

第1話 『元主人公 マト』

「やっぱりこの身体じゃ、力が上手くはいらねえ」

独特の口調で喋る者は悔しそうに壁を殴りつける。

ツフル人と呼ばれるものたちが開発した黒い戦闘服を身に付けている。

その下には白い、首まであるタイツを着ている。

髪は黒く、逆立っている。

尻尾こそないものの、その姿はある戦闘種族を連想させる。

彼の名をマト。

女のような顔立ちであるが男である。

そして、彼の姿を見て戦闘種族を連想するのも間違いではない。

彼はサイヤ人でもあるのだから。

そして妙にツフル人の開発した戦闘服が似合うのは彼がツフル人でもあるからだろう。

サイヤ人とツフル人のハーフ、それがマトだ。

「また、トレーニングをしているのか……いや、そうは見えんか」

地面を叩くマトに声かける男。

緑の髪に青い肌。

そして、なにより頭に残るのは“宇宙の帝王の側近”ということ

「ああ、ザーボンさん」

「戦闘力、また上がったんじゃないか？1200までになっているぞ」

「それでもまだ、栽培マンってんのと同じぐれえなんだろ？」

「ああ、今度びつたりなトレーニング相手でも連れてきてやろう。そうすれば強くな

りやすいはずだ」

「サンキュー……ありがとうございます ザーボンさん」

敬語はまだ使いなれないのだな、と少し笑いながらザーボンはマトのもとを離れいく。

マトがザーボン、いやフリーザ軍の元に入隊したのはつい1か月前。

その時は700程度だった戦闘力もトレーニングにより倍近くまで上がっている。

「……ちくしょう」

小さくこぼしたその言葉にはどうにもできない怒りがこもっていた。

彼には前世の記憶がある。

サイヤ人だった。

カカロット、地球育ちのサイヤ人として孫悟空として強大な敵と戦ってきた。

それがどうだ。

死んだ記憶はない、いつの間にか違う人物になり力もなくなっている。

親友を殺した敵の部下になっている。

いままで使っていた技を使おうにも記憶にモヤがかかるようで上手く思い出せない。

違う人物になったうえに、時間まで戻っている。

それだけなら、能天気な自分にとってそこまでダメージはなかった。

2日ほど前、赤ん坊の孫悟空が地球に向かうのを見た。

やはり、マトは孫悟空とは別人。

つまり、前世で自分の妻だった者も息子もライバルも仲間たちも。

今はそうではなくなる。

ひどい悲しみに襲われた。たくさんの涙も流した。

そして前世での経験をいかした修行をしてもなかなか成長できない。

切り札であった超サイヤ人にもなることはできない。

いつしか、マトになった孫悟空は目標を決めた。
孫悟空^{自分自身}を越える

それを達成するため、いまはかつて敵だった者の部下にでもなんにでもなつてやる。

おらはおらを越えるために……!!!

第2話 『打ち上げ直前』

「さて、ザーボンさん ドドリアさん いきましよう」

この宇宙すべてを支配する帝王 フリーザ様が私とドドリアの名を呼ぶ。

私の名前はザーボン。フリーザ様の側近だ。

「おい、ザーボン、あのガキこっちにくるぞ」

この美しくない男がドドリア、私と一緒にフリーザ様の側近をやっている。

しかし、子供が近づいてくるだど？スカウターは反応していないが。

いや、それほどまでに戦闘力が低いのだろう。

「…フリーザ！」

「おい、ガキ！フリーザ様になんのようにだ！」

私を後ろに押しつけてドドリアが前に出る。まったく、押し出さないでほしいものだ。

呼び捨てにしたのは無礼だが、フリーザ様の様子を見るに怒っていない。

ドドリア、今のフリーザ様は “そんな気分ではない”

「いいんですよ」

「フリーザ様…？し、しかし…」

「私がいいと言ったら言ったらいいんですよ」

ドドリアは睨み付けられ後ろに下がる。

フリーザ様は機嫌が良いときは多少の無礼は許してくださいさる。

何年この仕事をやったら、それを理解するのだ。

せつかく機嫌が良いのを悪くさせようとしなくてくれ。

「おらを、あんたのところで働かせてくれ！たのむ！強くなりてえーんだ！」

スカウターが反応しないほどの戦闘力の子供がなにを言っている？

「しかし、あなたの戦闘力では無理ではありませんかねえ」

フリーザ様も私と同じ考えをしていたようだ。

私たちがしている仕事は戦闘力がなければ意味がない。

「あ、そつか。はああああ!!」

「なっ!!このガキ…!!」

戦闘力0から720ほどまで上がった。

それでも対した戦闘力ではないが、スカウターに感知されないのは色々と役に立つだ

ろう。

「ほう、すばらしいですねえ。ところであなたサイヤ人のように見えますが？」

「ああ、おらサイヤ人とツフル人のハーフってやつなんだ！マトちゆうんだ よろしくおねげえします」

サイヤ人とツフル人のハーフか、ずいぶんと珍しい。

そして、戦闘力をコントロールできる。

これはフリーザ様やドドリアに渡して使い潰されては困る…。

「私が、この子供…：…マトのめんどうを見ましょう」

「…頼みましたよ、ザーボンさん」

フリーザ様の視線に一瞬、背筋が凍ったが無事にこの子供を私の下におくことができ
た。

ドドリアはこの子供の価値がわかっていないようだな。

明らかにわたしをバカにした表情だ。

「じゃあ、さっそく修行させてくんねえーか？」

「修行？ああ、トレーニングルームならすぐそこにありますよザーボンさん案内してあげなさい」

「わかりました」

向上心の強い子供だ。しかし自分でトレーニングをしてくれるのはありがたい。戦力が増えるのは嬉しいことだ。

——とところで

フリーザ様の声だ。

今の声には温度がない、威圧しているのがすぐにわかった。

「…なんだ」

しかし、マトは一切怯えず振り返った。

このガキ、どんな心臓をしている!?

—その戦闘力のコントロールはあなただけにしかできないモノなのでしょうか

「ああ、おらしかできねえ」

マトはフリーザ様の質問に即答した。

フリーザ様の言葉の意味は、他のものでも使えるのならマトを基盤に戦闘力をコントロールできるものを増やそうとかんがえているということだろう。

しかし、それはできないとわかるとフリーザ様はこちらに背を向けた。

「では、マトさんをよろしく頼みますよ　ザーボンさん」

マトが私の部隊に飛び入り入隊してから1カ月。

戦闘力は1200まで上昇し、幼くして栽培マンと同じ程度までに力をあげた。

たった一ヶ月で下級戦士たちに追いついたか、

前線で使える日も近そうだ。

いつか時間があれば、近い戦闘力をもつ者とトレーニングさせてやろう。

サイヤ人の下級戦士　ラディッツという子供が確かマトの戦闘力に近かったはずだ。

ほとんど同じ戦闘力、近い年代。　トレーニング相手にはぴったりだろう。

「おい、ザーボン」

「……ドドリアか」

私を呼んだのは誰かと、振り向けばいたのはドドリア。

まったくなんのようだ。

「フリーザ様がお呼びだ　いくぞ」

神妙そうな顔を浮かべ、歩いていく。

真面目な話のようだ。それにフリーザ様の呼び出しとあれば行かんわけにはいかん。

「ザーボン様、ドドリア様 お二人が来ました」

「そうですか、ではあなたはでていきなさい」

二人の到着を聞いたフリーザは部屋から名も知らない部下を追い出す。

「今回は……なんのお話でしょう?」

静寂の中、ザーボンがフリーザに質問する。

「実はですねえ」

フリーザがゆっくりと口を開く。

——明日 醜い猿共を滅ぼします

第3話『点火』

ふと、トレーニングの合間に心を癒すために黄昏ているマト。

頭ではふと、入隊するためにフリーザの元に現れたときのことを思い出していた。

おら、あんときフリーザに会うのにすげー時間がかかったんだよなあ。

護衛についてる兵隊たちは一人一人がおらよりつええし

数も多いから気を消してバレねえように移動したんだ。

そんでから、やつとフリーザに会って頼み込んで。

“その戦闘力のコントロールはあなただけにしかできないモノなのでしようか”

フリーザが威圧して質問してきたときは、おでれえたなあ。

まえのおら
孫悟空だったらフリーザなんか指一本で倒せるぐれえだったのに今は逆でフリーザがめちやくちやデカく見えた。

咄嗟におらしか無理っていったけんどあれで納得してねえだろうな。

あいつ、サイヤ人嫌いだからな。今のおらは半分はツフル人だけだ。

ザーボンさんは孫悟空まへのおらの時には会わなかったけど、いい人だぞお。
おらのめんどう見てくれっからな。

まあ、黄昏んのもこれで終わりにしていつちよトレーニングのつづきやってみっかなあ。

ある技を おらのなぜか曖昧な記憶を元に再現しようとしようとしてんだけんど上手いかねえんだよなあ。

「……………界王拳……………」

おつ、上手くいっ……………いてえ。

気が一瞬だけ倍になったあとと全身の骨が砕けちまった。

やつば、界王様が考えた界王拳じゃなきや効率がわりいなあ

それにおら、再現しようにも技造りとかにかがてだから それのせいでもあるんだろ
うなあ。

はあ、

またなんとかマシーンに入んなきゃなんねえ。

スカウターでおらの戦闘力は1300。

死の淵から復活したから1000上がったな。

やっぱ、純粋なサイヤ人じゃねえから全然あがんねえ。

ちなみにメデイカルマシーン？には駆けつけたザーボンさんが入れてくれた。サンキューザーボンさん。

『(おら流) 界王拳』の使い方を一つ考えてみた。

手のひらに気功波を作ってそれに界王拳をかける。

体にしちまつたらまたメデイカルマシーン行きだかな、正しい界王拳になるまでは二度と体には界王拳はかけねえ。

まあ、これで気功波の威力はだいぶ上がってるはずだ。

何倍までならいけっかな？

「3倍界王拳！」

気功波が爆発した。

体の近くで爆発したから、大ダメージだ。

ザーボンさん、来てくれーおらにはあんたとメデイカルマシーンが必要だー。

「お前の部下はバカだな」

「うるさいぞ、ドドリア」

まったくなんだというのだ。

今日だけでマトが2度死にかけた。

一度目はマトの戦闘力が一瞬だけ1800まで達し一気に虫の息ほどまでに落ち救難信号を受信し急いで駆けつけたメデイカルマシーンに投げ込んだ。

そして二度目。

マトが作り出した気功波がこれまた一瞬だけ3000になってすぐに消えた。

そして、マトの戦闘力は虫の息。

なぜ自爆している？　と思いつつながら駆けつけてメデイカルマシーンに放り込んだ。

マトよ。私は今“明日”のために忙しいのだ。

次ないぞ、もしかた同じことをするならば、トレーニングを禁止してやろう。
ん、そうだ。マトを明日同行させよう。

そうすれば、フリーザ様の忠誠心を確認できる。

まだ、フリーザ様はマトのことを信用しきつてないからな。

「おい、マト お前には明日——なにをしている？」

「界王拳の練習を……」

「界王拳というのはまさか……さつき瀕死になった原因の技か？………おい、答えろ
目を背けるんじゃないこつちを見ろ。マト……きさま……！カ月トレーニング禁止だ。

いいな絶対だ絶対だからな……！」

フリーではないぞ！絶対だからな！

しょんぼりしているが、知ったことではない。

おっと、忘れていた。

「マト、明日なんだが私の部下として初出動だ。花火を見に行く」

「へっ？花火？」

「ああ、ただの花火ではない……それにおまえにも少し戦ってもらおう」

「花火？闘う？意味わかんねえぞザーボンさん」

さあて、む？そういえばドリアのやつ 例のサイヤ人達もう処理したんだろうな？
下級戦士のわりに高い戦闘力をもつ連中達を。

たしか、そいつらのリーダーはバードック……だったか？

。

翌朝。マトは宇宙船に乗り込む前に天を見上げ、顔をしかめる。

「おら、なんだか胸騒ぎがするぞ」

第4話 『開花』

「ほう、今日 あの子供のサイヤ人の反応を見て忠誠心を確かめると……良いでしょう
かけてみることにしましょう」

フリーザは惑星ベジータを今日、滅ぼすために部下達を集め宇宙船に乗り込んだ。

「フリーザ…さん、いつてーどこに向かってんだ？」

「おや、マトさんお久しぶりですねぇ」

「…」

「惑星ベジータですよ」

フリーザが不気味な笑みを浮かべ答えるとマトは今日なにが起こるか察したよう
静かに部屋出ていった。

「……勘が良いですねえ」

フリーザは誰に言う訳でもなく、外の流れ行く星を見ながらまた笑みを浮かべた。

今日、サイヤ人が滅ぼされるんか……。

あのフリーザの笑みはそういう意味が込められてた。

ベジータとかは他の任務ちゅーうんに行ってるから生き残ると思うけど……。

おらのとーちちゃんやかーちちゃんもいるんかな。

孫悟空^まは孫悟飯^{じゅっちゃん}が親代わりだったかな。

……じつちちゃん、元気にしてつかない……。

惑星ベジータに向かうフリーザ達の宇宙船より少し先を飛ぶ一人用の宇宙船。

尊敬していた人物に裏切られ、それにより仲間を失なった。

カナツサ星人の幻の拳を受け突発的に頭痛と未来視が起る用になったサイヤ人の

下級戦士。

男の名をバーダック カカロツト^{孫悟空}の父だ。

彼は未来視で見たフリーザがサイヤ人への裏切りを止めるため、未来を変えるために惑星ベジータに急いでいる。

しかし、バーダックはその未来視に違和感を感じた。

なんだ、なにかがおかしい。

このナツパと戦っているのはカカロットか？

なぜだ、カカロットが含まれる未来視に全て“ノイズ”が走る。

記憶の隅に以前カカロットの野郎を見ていやがった“ツフル人とサイヤ人とのハーフのマトって野郎の顔”がごびりついて離れやしねえ。

やつは何者なんだ。なんであんな悲しそうな顔をしてやがったんだ。

いや、今はそんなことはどうでもいいか。

やつを、フリーザを倒して俺は未来を変える。

。

「おい、マトそろそろ到着だ」

「……ああ」

ザーボンに呼ばれ、マトは部屋を出て後ろをついていく。

「おまえには先陣を任せる、全員を倒せとはいわん。しかしフリーザ様に近づけさせるな」

マトはそれに無言で頷き、外にでるためのハッチの前に立つ。

「「到着だ！攻撃開始だ！！」」

次々と、戦士達が惑星ベジータに攻撃を開始し、マトも任務を果たそうと歩を進めようとする。ザーボンがマトの肩を掴む。

「危ないと思った退け、この任務を命じたのは私だが、それでもお前の能力は惜しい」

「ああ、サンキューなザーボンさん！」

ザーボンの指示を聞き終え、マトは戦場へと出る。

サイヤ人達はフリーザ軍の攻撃に戸惑い反撃もできない状態の者達がほとんどだが、元々、こちらからも攻撃をしかけるつもりだったベジータ王の率いる少数精鋭達は反撃を始めた。

反撃をする者達の中には、未来視によって情報を得た、バーダックの姿。

さあて、がんばるぞ。

けっこうみんなつええなあ、いや今のおらがよええだけか。

でも界王拳を使った気功波ならなんとか対処できそうだ。

「やがれ」

「ん？」

なんだ？いまなんか聞こえた気がするぞ？

「!？」

こつちにむかつてなにかが飛んでくる

「おめえらあ！よけろお!!」

そこを退きやがれええ
!!!!

紅い閃光が惑星ベジータからマトのもとまで一直線にのびる。

「おらは退かねええ!!」

気功波で拳を纏い、そこだけに気を一転集中させ界王拳を重ねその紅い閃光に拳を叩きつける。

「ぐっ?!!?邪魔だああ!!」

紅い閃光はマトの渾身の一撃で勢いをなくし散るとその中から一人の男が現れる。

行く手を塞がれ、苛立ったのかマトに反撃をする。

「なっ!?ぐわああ!!」

マトはその男の顔を見て動揺し、反撃を受け大きく後ろに吹き飛ぶ。

バーダック。

カカロットの父だ。

その顔は にそっくりで思わずマトは動揺してしまった。

「マトか…そうかてめえもそっち側か…」

「……あんたと面識はねえはずだ」

「カカロットの野郎を見てやがっただろう、それを見てたんだ それにしてもてめえは

サイヤ人とツフル人のハーフだろ おれら側じゃねえのか」

「ああ、おらはあんたの敵だ ここで止まってもらわなきや困る」

そうか…とバーダックは近づいてくる戦闘兵を吹き飛ばしマトを睨み付ける。

マトも戦闘力差があっても動じることなく、気功波を両手に作り出しバーダックを見

る。

「なら、てめえもころす!!」

身体にさえ界王拳を使わなきや問題はねえ、なら気功波だけに…!

「界王拳10倍だああああ!!」

「そんなものっ!? あぶねえ」

威力が倍増した気功波はバーダックにとつても危険で、弾き飛ばそうと触れていたらただではすまなかつただろう。

危険を察知し避けられたことにマトは表情を歪めた。

「まだだあ!!!」

「…いや、終わりだッ!」

「なっ!」

もうひとつの気功波を叩きつけようと急接近するが、バーダックに簡単に避けられ気絶させられる。

「いま、未来が見えたんだ…フリーザとカカロットそしてお前が睨みあつてんのを…だからつてわけじゃねえが生き残してやる…さアて」

気絶させたマトを気でできた球体で覆い放り投げる。

そして覚悟を決め一点を睨み付ける。

でてきやがれ フリーザ!!

おれは貴様が許せねえ!!!

「……ザーボンさん、上部ハッチをあげなさい」

「……了解しました」

開かれた上部ハッチからフリーザが姿を現し、バーダックを見る。

「……これで運命が変わるっ！フリーザアアア!!」

すべての運命を変えるため、身体中の力を使い気功波を作り出しそれをフリーザに向かって撃つ。

「ホーツホホ……目障りですよ」

「なにっ!？」

しかし、その気功波はフリーザの作り出し強大な気功波によって呑み込まれる。

「ふ、フリーザさまあ!？」

いくらここに部下がいようが

もう導火線に火はついた…。

その日惑星ベジータは消滅した。

「どうですか？ザーボンさん

ドドリアさん綺麗な花火ですよ」

第5話 『予兆?』

おい………おきろ

いつまで

寝てやがるんだ!!

「ああ!?!」

突然の大声に驚き飛び起きる男。

声をあげた人物を見て少し驚くが、すぐに切り替え睨み付けた。

ここにいる二人の男の顔は瓜二つ。

違いと言えば、一人は紅いバンダナを頭に巻き血まみれになっていることだろうか。

「てめえ、死んだって聞いたぜ…バーダック」

「ああ、おれも死んだと思った…ぜ」

バーダックは男の前にバタリと倒れる。

大量出血でかなり体に負担をかけているのだろう。

「あいにく、回復ポッドは壊れててな… “これ” でも食え」

「…ああ…!？」

男はポケットから果実を取り出し、それをバーダックの口の中に放り込む。

「以前いつていた、神精樹の実だ ちゃんとした治療効果はねえがある程度大丈夫だろ」
「そうだな…力がみなぎるぜ 今ならフリーザ野郎にも勝てる」

「お前の今の戦闘力は30000…ドドリアかザーボンをたおせるぐらいだろ…あと、フリーザの戦闘力は530000らしいぜ ほんとかどうかはしらねえが」

バーダックの戦闘力はサイヤ人の “死の淵から復活すると大幅に戦闘力が上がる”
というのと戦闘力を上昇させる特性のある神精樹を食べたことにより100000元の戦闘力の3
倍にもなった。

しかし、それでもフリーザの戦闘力にはとどかないと知るとバーダックは気持ちも落胆させる。

「まあ、ドドリアやザーボンを倒せるようになったんだ、大きく前進だろ……それよりなんでバーダックお前が生きてんだ」

「ああ、おれにもよくわかんねえんだがマトってガキに助けられたようなんだ……そうとしか考えらんねえ」

バーダックがフリーザの一撃に呑み込まれる瞬間、気絶させたはずのマトと目があつたのだ。

そして、それに驚いている間に意識を失い、気がついた星で男を見つけたのだ。

「まあ、んなことあどうでもいい　「ターレス」 どうせてめえも協力してくれるんだろ」「おれはフリーザに関わるなんざごめんなんだけどな　とりあはず宇宙船に行くぞ　俺の部下どもが待つてる」

バーダックはフリーザを倒す計画を立てるため、ターレスの宇宙船に共に歩いてい

く。

「(しかし、おれがマトを見たときやつは——
ガキ

——なんで髪が真つ白だったんだ?」

——惑星ベジータが滅んでから3日。

「おい、マト体調はどうだ?」

「ザーボンさん ぜんぜん平気だぞーだからさあ早く修行させてくれよ」

惑星ベジータの爆発を一番近くで受け生き残ったマトは一度は死にかけたがなんとか意識を取り戻し僅か3日で自由に動けるようになった。

「まあいいだろう、しかし明日からだ。トレーニング相手も私が用意してある栽培マン

ではない普通のサイヤ人だ」

「ほんとか!? サンキューザーボンさん! …じゃねえやありがとうござえます」

ザーボンはやはり、変なやつだと思いつつもマトのもとを離れ自分の仕事場に戻っていく。

あのマトの様子…本当に回復しているようだ。

回復力は普通のサイヤ人よりもあるのか?

おっと、今の戦闘力を測っておくか。

2100か…今回の事がある前は1400だったか? 珍しく大きく上がっているな”。これなら、戦線にたたせても簡単には死ななだろう。そこらにいる一般兵を越えたのは褒めるべきだな。エリート兵には負けるだろうが…。

明日からマトの練習相手になるラディッツの戦闘力が1500

戦闘力では差があるが面白い戦いになりそうだ。